かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第１４号（平成３０年１２月）

堅磐橋（かきわばし）
中山橋（なかやまばし）

あゆむ「葉山から、国道458号線に入った。」

ふみお「前は国道13号線と言われていたな。」

ミドリ「13号線は、今は東の山の方よね。」

あゆむ「道路が新しくなると番号も移ったり変わったりするんだ。」

文じい「そう。昔は、二日町口から川口の前までのこの道は“川口新道”と呼ばれた。明治10年に、3392円の経費でできた新道じゃ。」

あゆむ「へえ、安いね！」

ミドリ「お金のねうちがちがうのよ。今で言えばどのくらいなのかな？」

文じい「まあ、くらべるものによってかなり違うので簡単には言えんが、億や千万のお金じゃろう。」

ふみお「高松とか石曽根の地区の道路は、右側の道路なんだね。」

ミドリ「新道ということは、その前の時代の道路があったということね。」

文じい「ふむ。さらに古い道路は、先の文化財専門員の高瀬陽吉先生の調査研究によれば、逆に左の東側のようなんじゃ。」

ふみお「今は、高速道路がずうっと東側だしね。」

ミドリ「そうね。時代によって変わってきたのね。あ、川口に入ってきたわね。ここに新道がつながったのね。ということは、川口の道路はもとの道路だったの？」

文じい「そう。古道もだけれども、三本松の分かれ道から、藤吾、赤坂を通ってこの川口につながっている道もあった。」

ふみお「あ、そうか。長清水、三本松の“羽州街道”から藤吾、赤坂、そして、川口に来るわけだ。」

ミドリ「そして、米沢に向かっていたのね。」

文じい「そう。それで“米沢街道”とよばれていた。そのころは、川口は宿場でもあった。大名こそ通らなかったが、えらい役人や旅人、荷物がたくさん行き交った。」

ミドリ「なるほど。でも遠回りじゃない？」

文じい「昔、道路は、家と家、村と村、道と道をつなぐもの。だから、そこで方向が変わることの方が多い。今の道路は、逆に家や集落をさけて、できるだけ真っ直ぐ通そうとしてつくられておる。」

あゆむ「川口の道路は広いけど、人や車は少ないのは、左にバイパスができたためだな。」

文じい「以前は車が多く危険なことも多かった。」

ミドリ「ところで、見学する橋はどこなの？」

文じい「バイパスに入らず、ここを真っ直ぐじゃ。」

あゆむ「えっ！真っ直ぐ行けば前川ダムだよ。」

文じい「さあ、ここで降りよう。“新しいエネルギー回収施設”も近くだ。」

あゆむ「おお、これはすごい。」

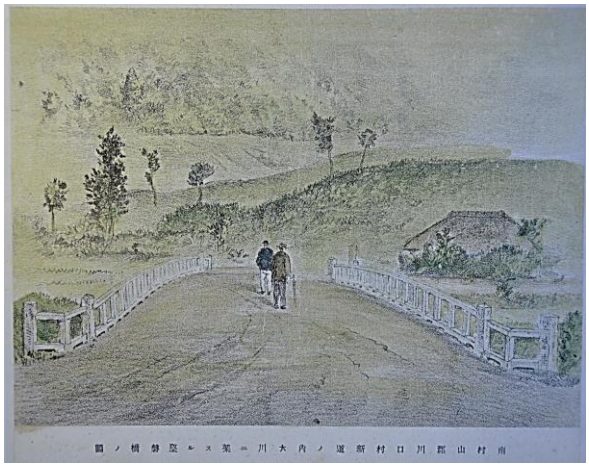
ミドリ「すばらしい眼鏡橋ね。」

あゆむ「みごとなアーチの石橋だ。」

文じい「明治11年につくられ、“川口眼鏡橋”とも呼ばれたそうじゃ。向こうを回れば橋の上を渡ることができる。」

ふみお「柱に“堅磐橋”と彫られているようだね。」

文じい「ふむ、そうじゃの。それから、そのころに高橋由一という人の描いた絵があるんじゃが、ちょうどこのへんからのものじゃな。」



「南村山郡川口村新道の内　大川に架する堅磐橋の図」

『山形大学附属博物館５０周年記念　明治の記憶　三島県令道路改修記念画帖』より転写

あゆむ「人が歩いていて、右に家がある。」

ミドリ「この道を奥に行くと行き止まりだわ。」

ふみお「線路で切られたけど、昔はこの道が中山に向かっていたようだね。」

あゆむ「さあ、次は中山橋だ。」

ミドリ「ここも、3本の道が並んでいるわね。昔の道、前の国、新しくできたバイパス道。」

ふみお「橋は、昔の道の方だね。」

あゆむ「これが石橋かな。見過ごしそうだな。」

ミドリ「下から見ると、がっちりしているわ。」

ふみお「アーチが二重になっているね。」

文じい「よく気が付いた。実は、加藤和徳先生が、

柱の裏側に彫ってあるものをみつけてくれた。わしも見たが、“明治十一年五月廿日 石工 菅野庄藏“とあるようじゃ。」

あゆむ「柱の表の字は、中山橋はわかるけど、こっちに彫られているのはどう読むのかな？」

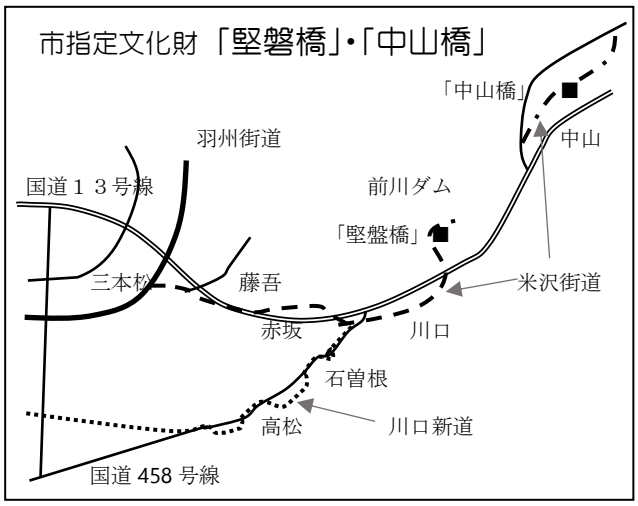
文じい「“奈可やま者し”と読む。変体仮名じゃな。」

ミドリ「同じころに道や橋が次々につくられたのはどういうことかしら。」

文じい「明治9年に、初めての山形県令に薩摩出身の“三島通庸”という人が来た。県令とは、今の県知事のような立場。三島県令は、山形県のたくさんの道路や橋を新しくなおしたりつくったりした。」

ふみお「それにしても、働く人の数、お金は相当なものだったろうな。」

文じい「ふむ。すばらしい工事だったが、土地のことも含めて、負担も大変であったようじゃ。そのことは、また次に考えてみよう。」



発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）